

角川総一の 金融 逆さメガネ

市

市場経済という名の競争メカニズムを取り入れた社会にあっては、試験制度は不可欠のものだとは思ふ。狭き門をくぐる人間を選抜するには、今のところ試験を最大のよりどころにせざるを得ないのは確かだ。しかしその試験制度があまりにも肥大化した結果、「試験のための試験」の様相を呈することが珍しくない。そしてその弊害を、私は随所に見ることが出来る。

本来履修すべきテーマより試験によく出るテーマ?

例えば、次のような例が掃いて

捨てるほど見受けられるのである。①標準偏差ならびにシャープレシオの計算はできる。しかし、複利

第34回

試験対策には熱心な行員の肝心の実務能力はというと...

複利計算ができないというような行員が多く見られる。資格の取得だけでなく、やはり銀行員たる者、計数感覚や計算実務能力は平均以上であってほしいものだ。

計算はできない銀行マン
②最適ポートフォリオならびに効率的フロンティアの概念はよく理解している。が、米国債券ファンDと国内のTOPIXインデックスファンDの組み合わせによるリスク分散効果については知らない
投資信託上級資格取得者
③市場リスクと非市場リスクについての概念は分かっている。しかし現実の株式銘柄に即して「非市場リスクは明らかに削減するが、市場リスクの低減効果には限界がある」事例を示すことはできない
FP上級資格取得者
大別すれば、本来履修してないけれども、本来自習してないけれども、試験に出る確率が高いテーマについての勉強に終始しているケース(①)、理屈は分かっているが、それが現実にとどまらずに生かせるのかについてのイメージが全く得られていないケース(②)と③の2つのタイプがあるのだと思う(もちろん教科書の記述の不備、不完全さも原因の一つ)。さて、今回は①について話そうと思ふ。

例えば、ある地方銀行のセミナーに呼ばれて行ったとしよう。受講者の中心は20代後半〜30代前半の男子行員(の場合を想起してみる)。そこで図表1にある(1)の問題を解いてもらう。しかし、ここで私は意外なことを発見することになる。そう。この問題を1分以内に解けない受講者が過半を占めるのだ。もう少し正確に言うと「1分以内に正解を得る受講者は全体の2割程度」なのである。さて、これは一体何を物語っているのか。私は次のように思う。そもそも「金融」とは何か。ドクターコバなりドクターコバによると「金が融ける」かもしれないが、一般的には「お金」を互いに「融通する」ことである。お金を互いに融通するに際して、必ず登場せざるを得ないのが次の4つの要素(ファクター)であることに異議はあるまい。すなわち、「元本」「期間」「利率」「元利合計」がそれだ(図表2参照)。

図表1

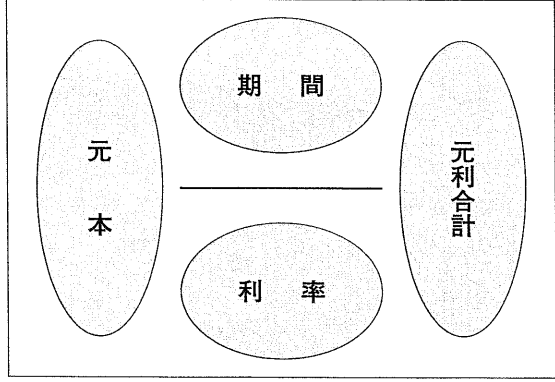
(1) 元本=1、利率=5%、時間=5年、半年複利とする。元利合計= ?

(2) $(1 + \frac{5}{200})^{10} = 1.28008...$

(3) $1.025 \times \times = \overset{2乗}{=} \overset{3乗}{=} \overset{4乗}{=} \dots \overset{10乗}{=} = 1.28008...$

9回

図表2 金融(お金を融通しよう)に必須の4つの要素



も単純な計算例だ。しかるに、である。もちろん正解は(2)で示したとおりである。しかも、多くの場合、ここでまた私は意外な光景を目にすることになる。

それは、このべき乗計算を行うに際して、電卓でまず「1」「0」「2」「5」「×」「1」「0」「2」「5」を計算。さらに「×」もつじうまく電卓を使えないものか

実はこうした計算ルーチンは「金利計算」という分野にのみ固有のものである。おおよそ定期的な定率で物事が変化していくというテーマについては、すべてこのルーチンが有効なはずなのだ。曰く、インフレ率、経済成長率、賃金上昇率等々。

私にとってみれば、このことは「大型コンピュータが何から何まで演算してくれるので、もはや電卓は四則演算だけにしか使えない」というイメージとダブっているのだ。しかし、暗算の延長線上でのちよつとした計算は、やはり電卓に依存せざるを得ない。もう少し電卓をうまく利用してほしいと思う。